

達成度（評価） A：十分達成できている B：おおむね達成できている C：やや不十分である D：不十分である

学校名	佐賀大学教育学部附属中学校
-----	---------------

1 前年度 評価結果の概要	・「学力の向上」について、研究3年目である「社会で生きて働く資質・能力の育成」や「質の高い深い学び」の実現に向けて、一定の成果は残せた。また、ICTの利活用については、教員によるICT機器を効果的に活用することができた。生徒は授業や実行委員会、等になってきており、自分の考えを表現することや情報を処理することに更なる向上を望んでいる。生徒たちの求めるより高い処理力・表現力の域に達するように、教員のICTを活用できる能力を高めるための研修等を行ってきたい。 ・「健康・体づくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、中学3年生は受験期ということもあり、運動する習慣が少なかった。中学1、2年生も決して高い値ではないため、体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係についてつなげたい。 ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、コロナ禍のときには、縮小されていた学校行事が再開され、それぞれの活動時間が長くなったことが要員である。時間外の勤務時間については昨年に比べて減少しているが、教職員個人の意識としては業務改善の意を込めて、校務分掌や学校行事の見直しや業務の分担をしていき、教員の健康面・精神面の負担を減らすだけではなく、教育の質も確保していく必要がある。 ・他は全体的に達成できており、成果が見られた。新研究に向けて研究を進めていくことはもちろん、令和8年度の部活動の停止に向けた取組や制服の見直し、学校行事の精選など引き続き継続して行っていく。
------------------	---

2 学校教育目標	本校の使命に応じて、高いレベルで自律し、共同することができる次世代リーダーを育成する
----------	--

3 本年度の重点目標	① 未来をひらく共創する学び手の育成を目指す。 ② 学校教育全体を通して、命や人権を大切に作る指導を行い、生徒の心と人権感覚の育成を目指す。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目							
重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	◎様々な学びの場面で、生徒自ら目標を設定し、行動し、振り返るAARサイクルを回す手立てをとることによる、エージェンシーの育成。	○指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価により得られた結果などを次期計画の修正に生かす教員85% ○学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると考える生徒85% ○課題に対して、目標を設定して取り組み、自らの取り組みについて振り返ることができている生徒80%	・各教科等における探究的な学びの在り方の追究 ・単元や題材を通して、生徒自身が見通しを持ち、取り組み、振り返ることができる学習過程の検討及び実践 ・課題設定や話し合いの場の機能、振り返り、評価方法等の工夫 ・各教科における単元または年間指導計画の見直し ・課題解決へのアプローチの明確化及び他者との協働による最善解の追究	A	・指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価問題により得られた結果などを次期計画の修正に生かすことができていると答えた職員は95%であった。 ・学校での学習が、学習意欲の向上、学ぶ意味や価値の充実に繋がっていると肯定的に考える生徒が92%で、保護者は85%であった。 ・学校での学習は、課題に対して目標を設定して取り組み、その取組を振り返ることで、自分自身を成長させていると捉えている生徒が93%であった。 ・どの項目においても目標値を超えているためA評価とする。 ・学校での学習が学ぶ意味や価値を充実につなげていないと感じる保護者が14%を占めていることを受け、授業改善を行っていくとともに、学校での学びを発信していくことを検討したい。	A	・アンケートの結果によると、指導計画実践についての職員の達成度は95%、学習意欲等に関して生徒の達成度は92%、保護者は85%、学校での学習に対する達成度は生徒が93%といずれも目標値を超えており、生徒や保護者からも高い評価をうけていることがわかる。 ・当該学校が掲げる協働的な学び、探究的な学びが実践されていることがこれらの結果から推察される。来年度以降も継続して課題解決に向けた取組を進めていただきたい。
	◎ICT利活用を通じて、個に応じた指導方法、学習時間、教材等を豊かで柔軟に提供する。	○各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した授業で、個に応じた指導を実践できる教員90% ○ICT機器を活用した学習において、考える力が高まったと感じる生徒90% ○生徒用パソコンを利用することで情報を処理したり、表現したりする力が高まったと感じる生徒90%	・教科固有の見方・考え方を働かせるために、ICT機器を効果的に活用する学習指導の実践 ・生徒用パソコンでの教材の提示を工夫し、個に応じた学びの場の設定 ・課題に対して考えを深める場面で、協働的な学びの場の設定 ・探究的な学びにおいて、情報を適切に処理したり、表現したりする力を高める指導の工夫	B	・各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した教員は95%を超えたが、個に応じた指導を実践できた教員は77%に留まった。 ・ICT機器を活用することで『情報の処理や表現』について高まったと肯定的な回答をした生徒が93.5%であった。また、『個に応じた学習』が行えた肯定的な回答をした生徒が92.2%であった。反面、ICT機器を活用することで『考える力の向上』を感じた生徒は87.8%に留まった。 ・生徒は授業や探究活動、委員会活動などで、ICT機器を利用する機会が多く、高い処理力・表現力を身に付け、自分の理解度に応じた学習に取り組んでいると考えられる。反面、他の生徒と考えを共有したり、考えを深めたりする場面では、直接的な対話や模造紙・ホワイトボードを活用する姿が多く見られたことから端末を活用して高まったと感じていないと考える。 ・今後は、端末の特性をいかした情報共有の場面設定や生成AIを活用して考えを深める場面を模索し、さらにICT利活用の充実を図っていきたい。また、生徒たちの求める高い処理力・表現力の域に達するように、教員のICT活用能力を高めるための研修等も行っていきたい。	B	・ICT機器を計画的に活用できたという教員は95%以上であり、生徒においてもICT活用について肯定的な印象をもっていたことは高く評価できる。 ・ICTを学習活動に活用することの利点のひとつは個々の進捗状況に応じた対応がなされるということだと考えられるので、個に応じた指導を実践できたという教員の割合が十分とはいえないところは、今後の課題としていただきたい。

	●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした生徒85%以上	・各教科の授業で、お互いが認め合えるような場の設定 ・学年職員のローテーションにより、組織的かつ計画的な道徳教育の実施 ・人権週間において、命や人権について考える機会を設置 ・夏季に人権・同和教育に関する職員研修を実施	A	・道徳に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした生徒が94%、保護者が89%であったため、十分達成できたと考える。 ・次年度も豊かな心を育成していくために、互いを認め合う場や、命や人権について考える機会を設定していきたい。	A	・生徒の倫理観を高め、社会の中の一員として生きていく態度をこの時期に身につけることは非常に重要である。アンケート結果が高い達成度を示していることは評価できる。今後も生徒にさまざまな知識や体験を提供し、人権に対する高い意識や豊かな心を育成していったらいたい。
		●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめの防止など(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的に対応ができていると回答した教員、生徒ともに85%以上	・心の扉(月1回)、いじめ実態調査(年3回)、教育相談等による生徒の状況の把握 ・生徒主体学活による人権学習の実施、生徒会と連携し、いじめゼロ宣言を活用するなどして、いじめを許さない心の育成	A	・いじめの防止に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をしている生徒が90%を超えており、かつ教員は100%であったため、十分達成できたと考えられる。次年度も継続して生徒とともに、安心して過ごせる環境をつくっていく。また、そのために心のノートや心の扉、いじめ実態調査などを活用し、日々の生徒の実態把握に努めるとともに、生徒主体学活等で人権に関する授業を展開していく。	A	・アンケート結果では生徒、教員ともにいじめ防止に対して肯定的な回答を得られており、高く評価できる。ただいじめの報告は毎年数件発生しているため、いじめ事案が皆無になることを目指して、取り組んでいくことを期待する。
		○エージェンシーを発揮する場としての生徒会活動の充実	○「自分たちの手で学校を創っている」について肯定的に回答した生徒80%以上	・生徒会活動について説明する対面式の設定 ・年2回の生徒総会を開催、自治の意識の醸成 ・生徒と教師が共にAARサイクルを回すことによる共創の姿勢の重視	A	∴「生徒会の様々な活動を通して、自分たちの手で学校を創っているという実感をもつことができましたか。」という質問に対して、肯定的な回答をした生徒は87.8%と、前回は上回る数値となった。保護者へのアンケートでも「本校の生徒会活動や学校行事をご覧になって、生徒たちが、自分たちの手で学校を創っていこうという姿が見られましたか」という質問に対して、肯定的な回答が97.3%と非常に高かった。よって、十分に達成できたと判断できる。	A	・附属中は以前から生徒会活動は盛んであったが、アンケート結果によると、さらに自主的な学校活動への意欲が向上しているということから、生徒の主体的な活動がなされていることをうかがい知ることができた。 ・保護者からも生徒会活動に対して非常に高い評価を得られており、今後も生徒の自主的な活動を見守っていくことが大事だと思われる。
	●健康・体づくり	●運動習慣の改善や定着化	○健康・体づくりに運動習慣は大切と考える生徒80%以上 ○授業以外で運動やスポーツを行う時間の合計が、1週間で90分以上の生徒80%以上	・運動習慣形成に関する意識調査 ・運動時間や過当たりの運動頻度の実態調査 ・調査結果と体力の関係を説明し、運動習慣の改善を推奨	B	・健康や体力向上に運動が大切と考える生徒は78.2%であった。 ・授業以外で運動を行う時間の合計が過当たり60分以上の生徒は51.8%であった。 ・学級指導や部活動指導の中で、生活の中に運動習慣を取り入れることの大切を指導することができた教員は78%であった。 ・子供の健康や体力づくりを意識して改善に取り組む保護者は70%であった。 以上のことから、健康増進や体力づくりの意識は高いものの、運動習慣へ結びついている生徒が少ないことがわかった。要因としては中3が受験期ということが影響したと考えられる(中3のみ29%)。運動習慣が定着化できるような体育的行事を生徒会や保護者、地域と連携をして積極的に取り組んでいきたい。	B	・身体的に急激に成長していく中学の時期において、運動によって筋力や体力を向上させることは重要であり、生徒自らが運動の必要性を理解し、実践しようとする態度を身につけることが求められる。 ・アンケート結果において、運動の必要性を理解し、生活習慣を改善しようとする生徒や保護者が一定数みられるものの、さらに取組を強化する必要があると考えられる。
		●基本的生活習慣の意識化と定着	○県が実施する「健康に関する意識調査」で、「健康において運動、食事、睡眠は大切」と考える生徒90%以上	・保健室来室時において、生徒自身が生活リズムを見直すなど個別指導の実施 ・長期休業前の保健指導や、学年育友会を通じて家庭への啓発 ・生徒会健康づくり部と連動した啓発活動	A	・県が実施した「健康に関する意識調査」では、98%の生徒が「健康において運動、食事、睡眠は大切」と回答し、県平均とほぼ同程度であった。中でも、中3においては、食事や睡眠を中心とした基本的生活習慣の実践ができている生徒が全体で90.3%と、他学年より高くなっており、受験期の過ごし方について、保護者のサポートや教職員の声掛けが健康管理の大切さを見直すきっかけになったと考える。一方で、中1においては、実践できていないと答えた生徒が12.8%いると同時に、13.7%の保護者が健康管理のサポートに積極的でないことが分かった。意識と実生活の乖離の要因を探っていく必要がある。	A	・アンケートによると、ほぼすべての生徒が運動、食事、睡眠の重要性を理解しているという結果であった。しかし、中1においてはそれらに関する生活習慣が十分でないという生徒が一定数存在し、また保護者についても理解が不足しているということであった。 ・生徒とともに、保護者に対しても、正しい生活習慣を子どもが身につけるように、学校の方から積極的に働きかけていくことが必要であると思われる。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	○時間外勤務を削減できるよう努力した職員80%以上。昨年度の時間外勤務の平均時間を下回る。	・退勤時間の揭示、アナウンス ・業務内容精選、見直しのための会議設定 ・勤務間インターバルを導入し、退勤から次の出勤までの休息時間を11時間以上を確保する。 ・R8に向けた課外活動のブレを実施 ・アンケートをデジタル化する	A	・勤務間インターバルの実施状況を把握するために、退勤から次の出勤までの休息時間を11時間以上取ることができたかという質問に対し、全職員が「よくあてはまる」「あてはまる」に回答した。業務内容を精選・見直しのために積極的にアイデアや意見を出すことができたかという質問に対し、肯定的に回答した職員が73%であった。保護者アンケートでも85%の保護者の方が肯定的に回答して頂いた。 ・全職員が勤務時間を守っている状況は評価できるが、業務内容の精選・見直しに対する職員の意識に差が見られた。会議での発言や提案を取り入れ、全職員で業務内容について検討していきたい。また、質の高い教育は確保しつつ、業務改善を進める一方、令和8年度の部活動の廃止に向けて、新たな放課後活動の提案や大学との連携など課外活動の充実を全職員で検討して準備を進めたい。	A	・働き方改革が求められる中で、退勤から出勤までの休息時間が十分に取れているとアンケートについて、全職員が当てはまるという回答をしているということであり、改革が進んでいると評価できる。 ・働き方改革の一環として、令和8年度から部活動の完全廃止を掲げており、それにむけて現行の部活動保護者に向けての説明会等を頻繁におこなっている。部活動についても社会体育へスムーズに移行し、教員の業務の軽減をさらに進めていくことが重要である。

